

中途脊髄損傷者における受傷から現在までの自己の再構築過程に果たす 運動・スポーツの役割

内田 若希

(九州大学大学院人間環境学府)

緒 言

現在, わが国における身体障害者は約 47,700 人にのぼると推定される (厚生労働省白書, 2002). 身体障害者のうち, 特に途中で受傷した者は, 人生の半ばで事故や病気のために身体機能や身体の一部を喪失し, 生活上の急激な変化やさまざまな喪失感を経験する (大和田・柏木, 1998). 高山 (1997) も, 中途身体障害者は, ある日突然に障害者となり, 身体的な変化や生活の変化, さらに社会的存在の変化を迫られる経験であるとしている. このような受傷経験に伴う心理的な影響は非常に大きく, 永久的に機能を欠損するような障害を受容することは難しいといえる (Asken, 1991).

中途身体障害者は, 身体機能や身体部位の喪失により, 自己像を歪めて自己評価を低下させたり (石川・堀毛, 2001), 身体的側面に関する自己評価, 身体的自己知覚, および身体満足度を低下させる (Lawrence, 1991) とされる. つまり, 中途の受傷経験は身体的自己知覚の低下に関連すると考えられる. また, 社会的差別に伴う心理的ストレス (村井, 1995), 障害に起因する個人と社会環境との関係における問題, 機会の制限, 社会における「障害者」というレッテル, および不利益な社会的立場 (Brasile, 1990) といった社会的な問題は否定的な知覚を生じさせるものであり, いくつかの研究で, 中途身体障害者が否定的な身体的自己知覚および社会的自己知覚を有することが報告されている (Blinde & McClung, 1997; Sherrill, 1997).

一方で, 運動・スポーツに伴う身体的側面の変化が, 自己への気づき, 身体の可能性へ影響し自己受容を導くのであり (Fox & Corbin, 1989; Sonstroem & Morgan, 1989), 運動・スポーツは, 身体障害者における自己概念の改善に寄与する一手段となりうる. 芝田 (1986) によれば, 身体障害者は, 運動・スポーツの中で自分の可能性を再発見し, それが大きな自信へとつながる. Goodling & Asken (1987) も, 身体障害者にとっての運動・スポーツは, 自己概念の評価的側面である自尊感情の再獲得につながるとしている. また, 運動・スポーツへの参加は, 身体的能力の再定義, 新しい身体経験の提供や新しい身体活動探求の自信の増大, 社会的な関わりや経験の拡大, 社会的スキルの増大, および新たな社会的活動の開始などをもたらすものとなる (Goodling & Asken, 1987; Blinde & McClung, 1997).

これらのことを鑑みると, 身体的自己知覚は, 自己概念やその評価的側面である自尊感情の下位概念であり, かつ自己の中心的要因であるので, 身体機能や身体の一部喪失によりそれまでの身体的自己知覚が歪められると自己全体 (自己概念や自尊感情) も揺らぐが, その一方で, 運動・スポーツを通じて障害受容が促されることで身体的自己知覚が再定義され, 自己全体も再構築される可能性があるといえる.

ところで, これまでの身体障害者における自己と運動・スポーツに関する研究の多くは, 対象者の確保が困難であることや, 身体障害が多岐にわたり複雑であることから, 研究デザインの乏しさがたびたび指摘されてきた (Fox, 2000). 身体障害者を対象とした研究における一つ目の問題点として, 自己概念に関する理論モデルに基づく研究の必要性が指摘されている. 自己概念やその評価的側面である自尊感情は, 多面的階層構造を有していることが多くの研究で支持されてき

た (Shavelson et al., 1976; Marsh & Shavelson, 1985; Fox & Corbin, 1989; Sonstroem & Morgan, 1989; Sonstroem et al., 1994). また, 近年では, 研究の枠組みとして多面的階層モデルの利用が推奨されている (Baldwin & Courneya, 1997; Sherrill, 1997). にもかかわらず, 身体障害者を対象とした研究のほとんどがこれらを単純な一次元モデルとして扱ってきた (Sherrill, 1997). 一次元モデルでは, 身体障害者の自己の基本構造や構成要素の関係性, およびその変化のメカニズムを明確にすることが困難であり, 本研究においては多面的階層モデルに基づいて検討していくことが望ましいと考えられる.

また, 二つ目の問題点として, 身体障害者を対象とした研究における量的アプローチの限界があげられる. 従来の量的アプローチでは, 既存の理論モデルから研究の設問と仮説を導き出し, それらを実証的データと比較し検証を行う. この研究方法では, 現象を計測し定量化することで客観的な結果を導き出し, それを一般化することが可能である反面, 方法論的な基準を満たそうとすると肝心の日常生活において意味のある問題から研究がかけ離れてしまうという問題点を含んでいる (フリック, 2002). 一方, 質的アプローチでは, 日常生活の多様性に対応するために研究対象に対する開放性が重要視され, 具体的な人や状況に結びついた知見を実証的データに基づいて生み出していくことを目指す. 実際のフィールドで出会う人々のものの見方や行為は実にさまざまであり, その背後には多様な主観的立場と社会的背景があるので, このような視点の多様性を考慮して研究を進めるのである.

方法論的な基準を満たすことが求められる量的アプローチにおいて, 身体障害者を対象として精度の高い研究を行うためには, 障害の種類や障害レベル, 受傷時期 (先天性/中途), 受傷経過年数, および人口統計学的背景 (性, 民族, 社会的経済状況) などのバイアスを削除するために, 多くの対象者を確保する必要がある (Sherrill, 1997). しかし, Fox (2000) は, 対象者の確保は容易ではなく, 研究デザインが稚拙になりがちであると述べている. また, Sherrill (1997) も, さまざまな障害に対応し測定をする困難さを指摘している. 加えて, 身体障害者を対象とした研究における結果の一般化やひとつの理論モデルをすべての障害者へ当てはめることの問題などもある (Sherrill, 1997; 高山, 1997). これらの問題を補うためにも, 質的アプローチが有効であると考えられる. これらのことから, 質的アプローチから得られる対象者の生きた資料と, 研究者のもつ概念や理論的枠組みを統合し, 中途身体障害者の自己そのものの本質やその変容プロセスに迫る新たな知見を探ることが望ましいであろう.

そこで本研究では, 自己概念に関する多面的階層モデルの中途身体障害者への適用を検討し, またその構造を明らかにすることを目的とした. ついで, 中途脊髄損傷者の生きた経験から, 自己の再構築過程に果たす運動・スポーツの役割について質的アプローチを用いて検討していくこととした.

研究 I 中途身体障害者への多面的階層モデルの適用とその構造

1. 目的

研究 I では, 中途身体障害者への自己概念に関する多面的階層モデルの適用を検証するとともに, その構造について検討することを目的とした.

2. 方法

2.1 調査対象者

途中で身体障害を受傷した 83 名 (男性 55 名, 女性 28 名; 47.9 ± 15.87 歳) を分析対象とした。障害の種類は脊髄損傷, 切断, 股関節障害, 視覚障害などであった。受傷年齢は 22.9 ± 17.09 歳, 受傷経過年数は 21.0 ± 16.17 歳だった。

なお, Godin & Shephard (1985) によって作成された Godin Leisure-Time Exercise Questionnaire (GLTEQ) を翻訳したものをを用いて, 本研究の対象者の活動量を測定した。GLTEQ とは, 過去 1 週間の余暇時間に激しい運動, 中程度の運動, および軽めの運動を 15 分以上行った回数を回答させ, 激しい運動 $\times 9$ + 中程度の運動 $\times 5$ + 軽めの運動 $\times 3$ = 余暇活動得点として算出するものである。かけ合わせる数値はそれぞれの運動強度における METs の推定値である。本研究における対象者の GLTEQ の得点範囲は 3—119 点であり, 平均点は 36.3 ± 24.88 点であった。日常生活において必要な身体活動は, 男性で週当たり 38 METs, 女性で週当たり 35 METs である (Bengoechea & Spence, 2002) ので, 全体的にみて日常生活に必要な最低限レベルの身体活動を行っている者が多かった。

2.2 理論モデル

Fox & Corbin (1989) によって提示された多面的階層モデル (図 1) では, 固有の身体的自己知覚として, 「スポーツ有能感」「体調管理」「魅力的なからだ」「身体的強さ」に関する知覚を含む。加えて, 包括的身体的自己知覚として, すべての下位領域を代表する知覚として定義される「身体的自己価値」を有する。「身体的自己価値」は, 自尊感情と身体的自己知覚の 4 つの下位領域における媒介変数として考えられている。このモデルは, 運動・スポーツに伴う体力や体型などの変化に伴い固有の身体的自己知覚が変容し, これにより包括的身体的自己知覚が向上することで, 最終的には自己概念の評価的側面である自尊感情も向上することを示唆したものである。

2.3 心理学的測度

2.3.1 Rosenberg の自尊感情尺度

自己概念の評価的側面である自尊感情を測定するために, Rosenberg (1965) が開発した自尊感情尺度を使用した。尺度得点は 4—40 点の範囲であり, 得点が高いほどより肯定的な自尊感情を示している。

2.3.2. 日本語版身体的自己知覚プロフィール改訂版 (PSPP-J 改訂版)

内田・橋本 (2004) によって作成された PSPP-J 改訂版は, Fox & Corbin (1989) の多面的階層モデルに準拠するものであり, 包括的身体的自己知覚としての「身体的自己価値」と固有の身体的自己知覚としての「スポーツ有能感」「体調管理」「魅力的なからだ」「身体的強さ」を含む身体面に対する知覚を測定する 5 因子各 4 項目で構成される。回答形式は, 「まったくそうでない」—「かなりそうである」の 4 件法であり, 得点が高くなるほど身体的自己知覚が高いことを意味する。

2.4 統計処理

Amos 5 によるパス解析を実施した。適合度指標には, GFI および CFI を用いた。モデルが適合するためには, GFI および CFI とともに 1 に近いほど良いモデルと判断し, .95 以上が基準値とされる (Hu & Bentler, 1999)。

3. 結果

自尊感情および PSPP-J 間の相関係数を算出したところ, すべて有意な値を示した (表 1)。そこで, 分析モデルでは, 4 つの下位領域間すべてに共分散を設定した。パス解析の結果, 適合度は GFI = .96 および CFI = .96 を示し水準を満たしていた。このことから, Fox & Corbin (1989) が提示した多面的階層モデルは, 身体障害者においても許容されうるモデルであることが示唆された。

つぎに、標準偏回帰係数をみると、「スポーツ有能感」および「体調管理」から「身体的自己価値」へのパスを除くすべてのパスにおいて、統計的に有意な関係が確認された(図2)。「スポーツ有能感」および「体調管理」から「身体的自己価値」へのパスは、修正の基準となる Wald 検定の統計量が 1.96 以下であったが、モデルの適合度が水準を十分に満たしたため削除しなかった。

4. 考 察

研究 I の目的は、Fox & Coribin (1989) の多面的階層モデルについて、中途身体障害者への適用とその構造を検討することであった。モデルの適合度から、Fox & Corbin (1989) の多面的階層モデルは、中途身体障害者においても適用しうることが示唆された。それぞれの観測変数の関係をみると、4 つの下位領域のうち「スポーツ有能感」および「体調管理」から「身体的自己価値」への標準偏回帰係数が有意な値を示さなかった。

「スポーツ有能感」から「身体的自己価値」への標準偏回帰係数が有意な値を示さなかった理由として、以下のことが考えられる。高齢者を対象に PSPP (PSPP-J の英語版) を用いて研究を実施した McAuley et al. (2000) は、「スポーツ有能感」の項目はスポーツ場面に特化しており、ウォーキングやストレッチなどの軽めの身体活動を主に実施している高齢者には不適切であるとして、この項目を削除して分析を行っている。本研究の対象者における身体活動量を示す GLTEQ の平均点は 36.3 ± 24.88 点であった。全体的にみて日常生活において必要最低限レベルの身体活動を行っている者が多く、激しいスポーツを行っているものは多くない。これらのことから、スポーツ場面に特化している「スポーツ有能感」の項目は適切ではなく、身体活動に関する固有の身体的自己知覚を検討する必要がある。

また、「体調管理」と「身体的自己価値」との関係性が認められなかった原因であるが、一般的に人間の心身機能は使用することによって増強され、何らかの原因で長期間使用しないと、機能の低下が引き起こされる(溝田, 1999)。これは廃用性症候群と呼ばれ、完治が難しい。中途身体障害者は、廃用性症候群により身体機能が低下しているため体調の維持・管理が難しく、「身体的自己価値」から「体調管理」を切り離して捉える可能性があり、身体的自己知覚のすべての側面が自己概念や自尊感情の向上につながらない可能性がある(Uchida et al., 2005)。

加えて、彼らの周りには、健常者と身体障害者という 2 つのカテゴリーがあり(Sands & Wettenhall, 2000)、どちらと比較するかが回答者によって統一されていなかったことが課題として残された。実際、調査中においても「障害者の中では優れていると思うけれど、健常者と比較したら良くない。どちらを基準に回答したら良いのか」と話す対象者も多くみられた。

以上のように、モデルの適合度は十分に高かったが、自己概念の評価的側面である自尊感情の構造では、「スポーツ有能感」および「体調管理」から「身体的自己価値」への規定力は認められなかった。つまり、健常者を対象に作成された多面的階層モデルを中途身体障害者へそのまま適用することには検討の余地があり、量的アプローチでは測りきれない実際の生きた経験から、中途身体障害者の自己の本質を探る必要がある。そこでつぎに、質的アプローチによる検討を行っていくこととする。

1. 目的

研究Ⅱでは、中途脊髄損傷者一事例を対象に、受傷から現在に至るまでの自己の再構築過程に及ぼす運動・スポーツの影響を探ることを目的とした。

2. 方法

2.1 調査対象者

中途脊髄損傷者1名を対象とした。対象者は30代の男性であり、5年前にバイク事故により脊髄を損傷した。脊髄損傷部位は腰椎1番である。現在は車いす陸上競技を実施しており、車いす競技歴は3年目であった。

2.2 データ収集

1時間30分程度の半構造化インタビューを実施した。また、補足のために1ヶ月後に再度40分程度のインタビューを実施した。インタビューの内容は、本人の許可を得てICレコーダで記録した。受傷前から直後、競技開始前から現在に至る身体的変化と身体的自己知覚の変化、および自己概念(自尊感情)や生活の満足感の変化を中心にインタビューを進めた。

2.3 データ分析

本研究では、質的内容分析による分析を行った。質的内容分析は、原則として既存の理論モデルに則ってカテゴリーを生成する。本研究では、Fox & Corbin (1989)の多面的階層モデルを参考にしながらまとめていくので、この手続きに従うこととした。

はじめに、ICレコーダに録音されたインタビュー内容をトランスクリプトした。数度にわたる精読を重ね、発話を意味内容のまとまりで区切り、サブカテゴリーのラベルづけを行った。ラベルづけされたサブカテゴリーのうち、重要でないものや同じ意味のものが他にある部分を削除したり、同じ意味の言い換えをひとまとめにしてカテゴリーを生成した。ついで、焦点がぼやけて曖昧な発話を、トランスクリプトしたテキストから追加の発言を探し明確化した。最後に、導かれたカテゴリーを整理し、理論由来のカテゴリーと新しく生成されたカテゴリーに分類し、いくつかの内容領域を構成した。

2.4 質的アプローチにおける信頼性

本研究では、①研究の目的とする類型の代表とみなされる事例の選択、②複数の分析者によるインタビューデータおよび結果の吟味、③他の視点(研究Ⅰの量的アプローチの結果)からの解釈と照らし合わせた2種類の情報の利用の3つの点から、トライアングレーションが確立された。また、研究者自身が対象者の練習や大会に同行し、対象者と関わりをもち観察を続けたことによって、ラポールが構築されていた。なお、初期の分析を行った3名は、K大学質的研究勉強会に長期にわたり参加して方法論を学んでいる者であった。また、結果においては、運動・スポーツ心理学および臨床心理学に精通する研究者らによっても吟味された。

3. 結果

3.1 受傷による自己の揺らぎ

突然の外傷性の事故により受傷し、身体機能や生活そのものの変化を経験した脊髄損傷者の自己の変化を表2にまとめた。受傷による身体的自己知覚の変化に関しては、Fox & Corbin (1989)の多面的階層モデルの下位尺度に準拠してまとめ、4個のカテゴリーと13個のサブカテゴリーを抽出した。社会的自己知覚の変化としては、5個のカテゴリーと11個のサブカテゴリーを抽出した。

また、自己の変化においては、1個のカテゴリーと5個のサブカテゴリーを抽出した。以下に、具体例を交えながらその内容を説明する。『』内は対象者の発話そのものを表記したものである。なお、分かりにくい方言に関しては下線を引き、[]内に方言を訳したものを記した。

3.1.1 受傷による身体的自己知覚の変化

身体能力の変化

Fox & Corbin (1989) の多面的階層モデルにおける「スポーツ有能感」の側面である身体能力の変化では、脊髄損傷によって生活の営みとなる下肢の運動や知覚の障碍、排泄機能の障碍、性的能力の制限が生じ、「○○ができなくなった」という認知が生じていた。また、すばやく動くという動作ができなくなったことに伴い、何事においても時間に余裕をもって行動する必要性を感じるようになっていた。

『だき [だから] 怪我してからね、もうそういう、ろくにね歩けん [歩けない] みたいな』

『なんかふと(生殖器に)触ったら感覚がなかつたき [なかつたから]、そのとききた。そのときに(ショックが)ドスーッときた』

『怪我する前とかさ、急がないといかんとかやったらさ [いけないとかだつたらさ]、あの一、ねえ、帳尻合わせられるやん。走る、走ったりするとかでね。それがちょっと合わせられなくなるやん、帳尻がね。そういうのはちょっとやっぱり前もってしたりとか』

体調の変化

「体調管理」の側面である体調の変化に関する身体的自己知覚では、受傷の前後において変化の気づきはないようであった。しかし、脊髄を損傷し入院したことをきっかけに、喫煙をやめるといった健康面への意識は高まったようである。

『あのICUでから30日、40日間ぐらい吸えんかつたっちいう [吸えなかつたっていう] のがあつたやん。(中略) もういいや、もうせつかくこんだけの大事故やきみたいな [大事故だからみみたいな]、せつかくやき [せつかくだから] タバコもやめてからね、きれいな肺でも取り戻そうかなみたいな、そんな感じ』

体型の変化

多面的階層モデルの「魅力的なからだ」の側面である体型に関する身体的自己知覚としては、事故により下肢が損傷を受けたことによる身体(筋肉)の一部損失や、残存機能の使用に偏りがあるために生じた体型の歪みを感じていた。

『いまものすごい右にこう、よっちょう [よってる] 感じで、たぶん背中とか歪んじょっちゃないやろうかね [歪んでるんじゃないかな]』

筋力の変化

「身体的強さ」の側面である筋力に関する変化では、脊髄損傷によって動けなくなったことに伴い活動量が低下したため、受傷前と比較して筋力が衰えてしまったという身体的自己知覚がみられた。また、失われた機能を補うために、残存機能の筋力向上の必要性を感じていた。

『〇〇 (受傷前の仕事: 肉体労働) しよったとき [していたとき] のほうがそのときはやっぱ筋肉はあったかもしれんね』

『上半身の筋肉をある程度使って補おうちいう [補おうっていう]』

3.1.2 受傷による社会的自己知覚の変化

日常生活の中心の変化

身体的制限に伴い社会的自己知覚においても変化が生じていた。受傷前は仕事や交友関係が生活の中心であった。しかし、受傷による身体的制限により仕事や交友関係における社会的立場を喪失し、これまでの生活が揺るがされたのではないだろうか。

『やっぱりもう、〇〇 (受傷前の仕事: 肉体労働) 7年もしちよったら [してたら] もう、それがやっぱりかなり人生においてさ俺にも影響させちようし [影響してるし]』

『(現在の仕事に対する自信は) あるかないかって言われたらぜんぜんないね。前はやっぱり、うん。』

『だき [だから] なんかけっこうへこんだのは自分の今まで生きてきた世界があって、友達がおって、それができなくなった [できなくなった]...世界があって』

受傷前の仕事への自信喪失および周囲との関係性における意識の変化

上述したように、受傷前は仕事に非常に自信をもっており仕事が生活の中心であったが、脊髄を損傷したことにより仕事をやめなければならなかった。生活の中で一番重要視し、自己そのものを支えていた仕事を失ったことにより、自分に対する自信も喪失したようである。また、受傷前は交友関係の重要度も高かったが、身体的制限があることで迷惑をかけたくない気持ちを受傷後にもつようになっていた。さらに、距離を置かれることへの不安や少しでも受傷前の日常を取り戻したいとの気持ちもみられた。

『(受傷前の仕事に関して) で俺はもうね、こんだけしきるき [これだけできるから] どこに行っても通用するちゅうて、食いっぱくれることはないみたいな、そういう絶対的なもう自分に自信...ちゅうか、絶対やっていけるちゅう、うん、のがあったきさ [あったからさ]』

『俺が行くことによって変わるから、次は呼ばんめえとかやめちよこうとかいう [呼ばないでおこうとかやめておこうとかいう]、こう距離置かれそうなのがイヤなんよね』

『誰々とかこういう遊びをもっとしたかったのに、いろいろね、まだずっとしたかったのに一ちゅうのもあるしさ』

今後の生活および行動範囲の変化

永久的に取り除くことのできない障害を受傷したことにより生活や人生の変更を余儀なくされ、今後の生活に対する不安や絶望がみられた。加えて、身体的制限に伴い行動範囲が制限され、社会的活動にも影響を及ぼしていた。

『結婚とかに関してはもうちょっと厳しかろうねって思いよったね [思ってたよね]、やっぱり』

『(行動するときも) 段差があったらやっぱちょっと厳しかったりとかして』

3.1.3 受傷による自己の揺らぎ

自己の捉え方の変化

脊髄を損傷したことで、健常者とは違う障害者の世界になったとの認識が生じていた。また、それに伴い、以前の自分とは違う、前より悪い世界に自分はあるとの意識がみられ、自信を喪失したようであった。

『普通一般の生活でね。他の人ができて俺たちが、他の人ができなくて俺たちができるっっちゃうのはあんまりないやん』

『うーん。なんかもう障害者っっちゃう、まったく知らん世界に今からこうね、けっこう関わっていかないかんわけやん [いかなくちやいけないわけだよな], イヤでも』

『なんかこうほんと自分が止まっちゃう [止まってる] みたいなところが。(中略) 止まってる、取り残されてるみたいな。 だき [だから], 悪いところにいるみたいな』

3.2 運動・スポーツに伴う自己の再構築

つぎに、Fox & Corbin (1989) の多面的階層モデルに準拠して、運動・スポーツに伴う身体的自己知覚の変化をまとめた(表 3)。具体的には、4 個のカテゴリーと 5 個のサブカテゴリーを抽出した。また、運動・スポーツに伴う社会的自己知覚の変化として 4 個のカテゴリーと 7 個のサブカテゴリーを、自己の再構築として 4 個のカテゴリーと 8 個のサブカテゴリーを抽出した。以下に、具体例を交えながらその内容を説明することとする。なお、具体例の『』内は対象者の発話そのものを表記したものであり、分かりにくい方言に関しては下線を引き、[]内に方言を訳したものを記した。また、ここでの運動・スポーツとは、対象者が行っている車いす陸上競技である。

3.2.1 運動・スポーツ開始に伴う身体的自己知覚の変化

身体能力の変化

Fox & Corbin (1989) の多面的階層モデルにおける「スポーツ有能感」の側面である身体能力に関してみると、運動・スポーツを開始したことにより、競技用の車いすを駆使するという新しい動作が獲得されており、これが後の自己の可能性の発見や向上心に寄与している可能性がある。

『どこどうしていいのかわからんし。そんな体勢とかもう取ったこともないしさ。レーサー(競技用車いす)に乗った状態とかもないしさ。...もう初めてやったき [だったから], ぜんぜん、うん』

体調および体型の変化

「体調管理」の側面である体調の変化に関しては、運動・スポーツに伴う変化は知覚していないようであった。つぎに、多面的階層モデルの「魅力的なからだ」の側面である体型に関する身体的自己知覚としては、トレーニングに伴い筋肉が強化され、体型が変化したと捉えていた。

『筋肉は見た目的について...(中略) 見た目的には、うん、全体的についたなみたいなかんじやね』

筋力の変化

「身体的強さ」の側面である筋力に関する変化では、筋力トレーニングを開始したことにより、筋肉や筋力、およびパワーなどの向上を知覚していた。

『筋力...いやいや今のがぜんぜんついちょうやんね [ついでるね]』

3.2.2 運動・スポーツ開始に伴う社会的自己知覚の変化

情報的サポート

車いす陸上競技を通じて出会ったトップレベルの車いす陸上競技選手における練習の仕方や精神的強さを見る機会を得たことは、良い刺激となって働いたようである。また、その刺激を受けて練習を続けるに従い、周囲からの評価も得られるようになった。

『やっぱりあの Yさんと Sさんの存在やね。あの二人がやっぱずば抜けてレベルの高いところにおるき [いるから]。まあ、競技的にレベルが高いちゅうことはやっぱ精神的にも、良い、もう大体比例しちょうわけやん [比例してるわけだよ]。(中略) だからこう一生懸命しよう人とか見よったら [一生懸命してる人とか見てたら] 俺もそれでつられて』

『周りからすれば一生懸命って言われるんよね』

重要な他者

車いす陸上競技を通じて出会った重要な他者が、自分を認めてくれたことにより自信を回復し、今後の生活に対する不安や絶望が緩和されたようであった。特に、伴侶として共に生きたいと考える重要な他者の獲得が大きかったようである。この意味でも、運動・スポーツを通じて世界が広がったといえるかもしれない。

『(自信がないということは) うん。あんまりないね。うん。S (重要な他者) みたいな人見つけたしね』

『そういうのはやっぱ...やっぱちょっと認めてくれたとかっていうのはやっぱり大きいよね』

新たな生活の中心および交友関係の再構築

完治が困難な障碍に伴う身体的制限は、自己を支えていた社会的自己知覚をも喪失させたが、車いす陸上競技を開始したことで、陸上競技といった新たな生活の中心を得ることができていた。陸上競技を始めるまでは、障碍があるために友人との関係に距離を置くといった否定的な考えであったが、陸上に打ち込むためといったポジティブな原因帰属への変化もうかがえた。

『(陸上を始めてから生活が変わったかという問いに対して) うん、もうもうすべて、もう全然変わちょうよね [変わってるよ]。だってもう.....陸上のことばかり考えちょうやん [考えてるし]。うん。酒も飲みに行かんく [行かなく] になったし、友達ともね遊ぶこともほとんどないし』

3.2.3 運動・スポーツ開始に伴う自己の再構築

新たな自己

車いす陸上競技を初めて見たときに受けた感動や興奮が、自分もやってみたい、できるのではないかといった自己の可能性に挑戦する気持ちをもたらしただようである。また、実際に車いす陸上競技を開始したことにより、障害者と健常者の世界に差異はなく、自己の可能性は閉ざされていないことに気づいたり、事故による受傷や車いす陸上競技選手との出会いといったライフイベントを通じて、受傷前に感じていた「何事にもいい加減な自分」が変わったと捉えていた。

『でやっぱマラソンっちなったら [マラソンってなったら] やっぱこう、努力だけでからけっこういきそうやん。かなり上位まで。もう努力だけセンスとかどうのこうのとか無視してね』
 『生きてきた過程で、ずーっと 20 何年間で知った世界が。その世界ともうあんまり変わらんよ
 うな世界を知ったちゅう感じ』
 『(昔からの地元の友達に対して) その人は別に変わらず、精神的に変わらず、ね、生きちよ
 うき [生きてるから]、日常的に別にねえ、俺みたいに怪我したとか誰々と衝撃的に会ったと
 かさ、そういう出来事がないきさ [ないからさ]』

アスリートとしての自己

運動・スポーツを開始したことにより、受傷前にはみられなかった競技選手としての自己が生じていた。特に、競技レベルをあげていきたいといった向上心や目標設定は、受傷前にはみられなかったものである。それと同時に、記録や勝敗以上の意味として、チームの一員として、チームから必要とされている自分を重視しているようであった。

『(現状に満足するのではなく) 俺的にはまだその上を見ようき [見てるから]』
 『(現在所属チームの主要人物から) もうねえもうあれやったらチームとしてからね一緒に走ろ
 うやみたいなこと言われて (中略) やっぱこう中心の人が、ね、やっぱこう俺的にはこうチ
 ムとして言ってもらいようみたいなのを感じたきね [言ってもらってるみたいなのを感じた
 からね]』

生活の充実および受傷前の自己の再現

生活そのものに関しても、陸上競技が生活に楽しみを提供し、受傷前も障害を負ってからも、いずれも変わらず楽しいと考えるようになったようである。そして何より、受傷後は障害者になったという意識から謙虚さを保とうとしていたが、自信の回復に伴い受傷前の自分を取り戻していた。これは、一度は揺らいだ自己が再構築されたひとつの象徴と考えられる。

『楽しいことがあるちゅうか、もう世界的なもんやんね。楽しい世界があるちゅう。(中略)
 明るく生きちようちゅうか [生きてるっていうか]、うん...明るく生きようとして生きちよ
 う人 [生きてる人] やないみたいな。普通に楽しいき [楽しいから] 普通みたいな』
 『怪我したときに、こう、前向きさがあるんやけど、また今こう、そういうこう怪我した前み
 たいなかんじな、人にガーっち言ったりとか [ガーって言ったりとか]、そういうのが増えて
 きたね。(中略) いやもともと。基に戻ったみたいなかんじ。(中略) 良いことやね。自信が(戻

った)』

4. 考 察

本研究では、質的アプローチにより、対象者の実際の経験から、Fox & Corbin (1989) の多面的階層モデルに基づく既存の理論を現実のデータへ適用する可能性を検証し、また、行動や心理現象を生きている対象や状況から切り離さずに捉え、中途脊髄損傷者の自己の再構築過程に及ぼす運動・スポーツの影響に迫ることを目的とした。

4.1 揺らぐ自己

脊髄損傷という事故により、下肢機能全廃、膀胱・直腸障害が生じ、またこれらに伴う体型や筋力の変化が起こることは、身体機能や身体の一部喪失など身体そのものに変化をきたすものであるため、それまで存在してきた身体的自己知覚が喪失していた。そしてこれに伴い、障害を負った身体を受容することができなくなり、「障害者になった」「健常者とは違う世界」といままでの自分とは異なる自己が生じていた。

また、受傷前の自己を支えるものは、仕事や交友関係という社会的側面であり、特に仕事に対する自信は、『それがやっぱりかなり人生においてさ俺にも影響させちゃうし[影響してるし]』との発話にもみられるように非常に高かった。しかし、身体障害により仕事ができなくなり、対象者の自己は大きく揺らいだ。Fox (1998) が、自己の中心的要素は身体的自己知覚であると述べているように、ともすると対象者の受傷前の中心は社会的自己知覚であるようにみえるが、さらにそれを下位で支えているものは「からだ」であり、身体的自己知覚であると考えられる。

4.2 運動・スポーツの果たす役割

その一方で、車いす陸上競技を開始したことで、身体的自己知覚が再定義されていた。受傷直後は、「できなくなった」ことへの気づきが強かったが、車いす陸上競技を開始することで、レーサー(競技用の車いす)を駆使するための動作獲得といった、新たな身体的自己知覚が提供されていた。また、運動・スポーツを通じて、体型や筋肉、筋力などの向上といった身体や身体機能そのものの変化とそれへの気づきが生じていた。

さらに、車いす陸上競技を初めて見たときの衝撃が、自己の可能性に挑戦する気持ちを目覚めさせていた。Bandura (1977) は、同じような能力の人が成功裡に遂行している様子を観察することで、自分自身の能力を感じ取ることができるとしている(代理的経験)。本研究の対象者も、自分と同じ脊髄損傷者が、車いす陸上競技を成功裡に行っているさまを見ることで代理的経験を獲得し、身体に障害を有していても自己の可能性は閉ざされていないことに気づくきっかけになった。身体障害者は、運動・スポーツの中で自己の可能性を再発見し、それが自信や身体能力への気づきへとつながるとされ(芝田, 1986; Blinde & McClung, 1997)、本研究の結果は自己の可能性を再発見した一例を示すものであり、受傷により揺らいだ自己の再構築の一過程を示唆するものであった。

また、運動・スポーツを通じて身体的自己知覚が再定義されただけでなく、新しい社会的自己知覚も生じ、車いす陸上競技の開始は、仕事や交友関係以外の「競技」という新しい世界をもたらした。これにより、受傷前には存在していなかったアスリートとしての自己が構築されていた。対象者は、一度は自分に「障害者」というレッテルを課したが、アスリートとしての自己の表出によりこれを取り除くことができたようである。これは、生活の中心が仕事や交友関係から競技に変わったことにより、価値の捉え方が変化したためと考えられる。価値の重みが競技に移行し、

障害があるから別の世界になったわけではなく、障害があってもできる、障害があるだけで以前の世界と変わったわけではないと捉えなおすことができたのである。これらのことから、受傷前と現在とで自己の満足度は同じように高いことが明らかになった。しかしながら、自己を支えるものには変化が生じており、新しい価値を提供したものが運動・スポーツであったといえる。つまり、運動・スポーツは、受傷前の仕事や交友関係といった価値のあるものを喪失した感情から脱却させ、新しい価値体系を得る過程を提供するといえる。

4.3 量的データとの関連

研究 I で、多面的階層モデルに準拠して中途身体障害者における構造を検討したところ、「スポーツ有能感」および「体調管理」から「身体的自己価値」への標準偏回帰係数は有意な値を示さなかった。表 2 にみられるように、「スポーツ有能感」の側面として位置づけられる身体能力のカテゴリーでは、基本的な動作に関する身体能力の変化が多くみられ、スポーツ場面というよりも日常生活動作に特化した要因を位置づける必要があるといえる。また、運動・スポーツ開始後の身体能力のカテゴリーをみても、運動・スポーツ場面での動作獲得が向上心へとつながる一方で、日常生活動作の変化はみられなかった。これは、対象者の脊髄損傷という特性により日常生活動作の改善が難しいためといえる。しかし、股関節障害や切断といった他の障害においては、運動・スポーツによる日常生活動作の改善が期待でき、障害の種類によって「スポーツ有能感」の変化が異なると推察される。このことから、「スポーツ有能感」の意味の質は健常者と同質ではなく、また障害ごとに異なるので、量的アプローチでは限界があったといえよう。今後、脊髄損傷者以外の中途身体障害者においても質的アプローチを用いて検討を行い、今回の結果と比較することが望まれる。

さらに、本研究の対象者において、体調面の変化への気づきは受傷後および運動・スポーツ開始後で特にみられず、「体調管理」の変数は、中途身体障害者を対象に検討する際には重要な変数とはならない可能性があり、多面的階層モデルにおいてこれらの変数の位置づけを再検討する必要がある。本研究の対象者においては、体調や体力の自信というよりも身体的健康を維持する関心が高かった。これを踏まえると、中途身体障害者においては、二次障害や廃用性症候群などの中途身体障害者に特有の要因を位置づける必要性が課題として残された。

5. まとめ

Shavelson et al. (1976) は、自己概念は発達的な概念であり、人が自己を形成する上で経験する環境が重要な役割を果たすと述べている。また、中途身体障害者を対象とした研究において扱われる障害受容は、中途身体障害者の内面で時間の経過とともに自然に変化する個人的な経験ではなく、時間や周囲の人間、そして行動との関係性の中でダイナミックに変容する力動的な体験である(高山, 1997)。つまり、築きあげてきた自己が受傷により揺らぎ、その後自己が変容していく上で、運動・スポーツという経験が中途身体障害者に果たす役割は非常に大きい。運動・スポーツが提供するアスリートとしての世界や残存機能の可能性への気づき、周囲からのサポートの体験は、受傷による喪失感からの脱却と生きる意味の再定義につながるものであり、運動・スポーツを通じて、自己の可能性へ挑戦する機会を提供することができるであろう。

本研究では、Fox & Corbin (1989) の多面的階層モデルに基づきつつも、現実の行動や心理現象を生きている対象や状況から切り離さずに捉え、中途脊髄損傷者の自己の変容過程をより詳細に説明してきた。障害と共に生きる者が増加し、生き方への援助が問題となっている今日、中途身

体障害者の自己の本質とその変容過程に果たす運動・スポーツの役割に迫る新たな知見が得られたことは、非常に意義がある。

参考文献

- Asken, M. J. 1991 The challenge of the physically challenged: Delivering sport psychology services to physically disabled athletes. *The Sport Psychologist*, 5, 370-381.
- Baldwin, M. K., & Courneya, K. S. 1997 Exercise and self-esteem in breast cancer survivors: An application of the exercise and self-esteem model. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 19, 347-358.
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84 (2), 191-215.
- Blinde, E. M., & McClung, L. R. 1997 Enhancing the physical and social self through recreational activity: Accounts of individuals with physical disabilities. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 14 (4), 327-344
- Brasile, F. M. 1990 Wheelchair sports: A new perspective on integration. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 7, 3-11.
- フリック, U.: 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子 (訳) 2002 質的研究入門—「人間科学」のための方法論. 春秋社.
- Godin, G., & Shephard, R. J. 1985 A simple method to assess exercise behavior in the community. *Canadian Journal of Applied Sport Sciences*, 10, 141-146.
- Fox, K. R. & Corbin, C. B. 1989 The physical self-perception profile: Development and preliminary validation. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 11, 408-430.
- Fox, K. R. 2000 The effects of exercise on self-perceptions and self-esteem. In S. J. J. Biddle, K. R. Fox, & S. H. Boutcher (Eds.), *Physical activity and psychological well-being*. London: Routledge.
- Goodling, M. D., & Asken, M. J. 1987 Sport Psychology and the physical disabled athlete. In J. R. May, & M. J. Asken (Eds.), *Sport Psychology: the Psychological Health of the Athlete*. New York: PMA Publishing Corp, pp. 117-133.
- Green, B. C., Pratt, C. C., & Grigsby, T. E. 1984 Self-concept among persons with long-term spinal cord injury. *Archives of Physical Medicine and Rehabilitation*, 65, 751-754.
- Hu, L., & Bentler, P. M. 1999 Cutoff criteria for fit indices in covariance structure analysis: conventional criteria versus new alternatives. *Structural Equation Modeling*, 6, 1-55.
- 石川まり子・堀毛裕子 2001 リハビリテーション過程における自尊感情の変容—日常生活動作, 心理・社会的要因との関連—. *ヒューマン・ケア研究*, 2, 24-31.
- 厚生労働省 (編) 2002 厚生労働省白書. ぎょうせい.
- Lawrence, B. 1991 Self-concept formation and physical handicap: Some educational implications for integration. *Disability, Handicap & Society*, 6 (2), 139-146.
- Marsh, H. W., & Shavelson, R. 1985 Self-concept: Its multifaceted, hierarchical structure. *Educational Psychologist*, 20 (3), 107-123.
- McAuley, E., Katula, J., Duncan, T. E., & Mihalko, S. L. 2000 Physical activity, self-esteem, and self-efficacy relationships in older adults: A randomized controlled trial. *Annals of Behavioral Medicine*, 22 (2), 131-139.

- 村井潤一 1995 障害児・者の発達. 村井潤一・藤田綾子 (編), セミナー介護福祉 (7) 老人・障害者の心理. ミネルヴァ書房. pp. 131-139.
- 大和田攝子・柏木哲夫 1998 中途障害者における受傷後の適応に影響を及ぼす心理・社会的要因. 臨床死生学, 3, 64-74.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the Adolescent Self-Image*. New Jersey: Princeton University Press.
- Sands, R. T., & Wettenhall, R. S. 2000 Female wheelchair athletes and changes to body image. *International Journal of Disability, Development and Education*, 47 (4), 413-426.
- Shavelson, R. J., Hubner, J. J., & Stanton, G. C. 1976 Self-concept: Validation of construct interpretations. *Review of Educational Research*, 46, 407-441.
- Sherrill, C. 1997 Disability identity and involvement in sport and exercise. In K. R. Fox (Ed.), *The physical self: From motivation to well-being*. Illinois: Human Kinetics. pp. 257-286.
- 芝田徳造 1986 スポーツが障害児者にもたらす効果. スポーツは生きる力—はばたけ! 障害者スポーツ—. 民衆社. pp. 43-47.
- Sonstroem, R. J., Harlow, L. L., & Josephs, L. 1994 Exercise and self-esteem: Validity of model expansion and exercise associations. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 16, 29-42.
- Sonstroem, R. J., & Morgan, W. P. 1989 Exercise and self-esteem: Rational and model. *Medicine and Science in Sports and Exercise*, 21, 329-337.
- 高山成子 1997 脳疾患患者の障害認識変容過程の研究—グランデッドセオリーアプローチを用いて—. 日本看護科学会誌, 17 (1), 1-7.
- 内田若希・橋本公雄 2004 日本語版身体的自己知覚プロフィールにおける回答形式の改訂—改訂版の作成と男女差の検討—. スポーツ心理学研究, 31 (2), 19-28.
- Uchida, W., Hashimoto, K., & Lutz, R. 2005 Examination of the hierarchical self-esteem model in adults with physical disability. *Perceptual and Motor Skills*, 100, 1161-1170.

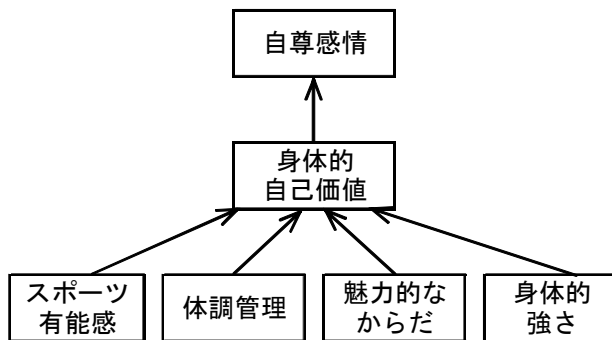


図1. 自尊感情の多面的階層モデル (Fox & Corbin, 1989)

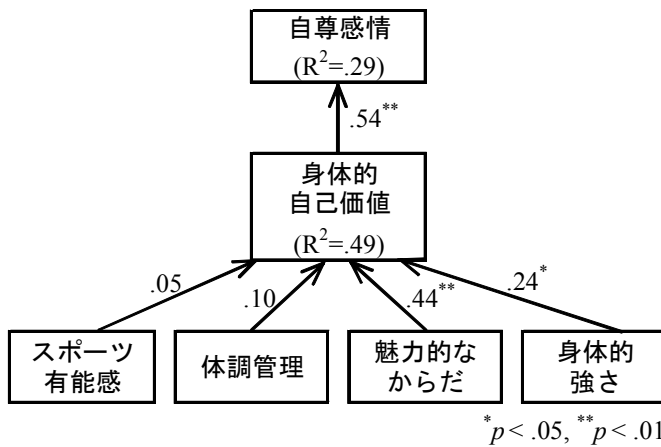


図2. Fox & Corbin (1989) の多面的階層モデルの検証

表1. 自尊感情と身体的自己知覚間の相関係数

| | スポーツ有能感 | 体調管理 | 魅力的なからだ | 身体的強さ | 身体的自己価値 | M | SD |
|---------|---------|------|---------|-------|---------|------|------|
| 自尊感情 | .51 | .47 | .43 | .47 | .54 | 28.6 | 5.13 |
| スポーツ有能感 | | .65 | .51 | .54 | .46 | 11.2 | 2.52 |
| 体調管理 | | | .46 | .61 | .47 | 11.7 | 2.34 |
| 魅力的なからだ | | | | .60 | .65 | 8.7 | 2.83 |
| 身体的強さ | | | | | .59 | 9.3 | 2.83 |
| 身体的自己価値 | | | | | | 10.2 | 2.49 |

すべての相関で $p < .01$

表2. 受傷に伴う自己の変化

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|---------------------------|---|
| <身体的自己知覚の変化> | |
| 身体能力の変化 | 歩行の制限 走行の制限 足を使う動作の制限 排尿・排便能力の制限 性的能力の制限 スピーディな動きでの時間調節不可 バランス能力の欠如 |
| 体調の変化 | 健康への意識 |
| 体型の変化 | 筋肉の一部欠損 受傷前の体型の喪失 体型の歪み |
| 筋力の変化 | 受傷前の筋力の喪失 身体能力を補うための筋力の必要性 |
| <社会的自己知覚の変化> | |
| 日常生活の中心の変化 | 仕事中心の生活を喪失 仕事を非重視 交友関係中心の生活を喪失 交友関係の制限 |
| 受傷前の仕事への自信喪失 | 仕事への自信喪失 |
| 周囲との関係性における意識の変化 | 人に迷惑をかけたくない 距離を置かれることへの不安 受傷前の日常への渴望 |
| 今後の生活 | 結婚への憂慮 今後の生活への不安 |
| 行動範囲の変化 | 行動範囲の制限 |
| <自己の変化> | |
| 自己の捉え方の変化 | 障碍による制限への気づき 障碍者という認識 自信喪失 健常者との比較 取り残された自分 |

表3. 運動・スポーツに伴う自己の変化

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|---------------------------|---|
| <身体的自己知覚の変化> | |
| 身体能力の変化 | 新しい動作の獲得 |
| 体調の変化 | 受傷後体調の変化なし |
| 体型の変化 | 体型の向上 |
| 筋力の変化 | 筋力の向上 筋肉の発達 |
| <社会的自己知覚の変化> | |
| 情報的サポート | 他者からの刺激 周囲からの評価 |
| 重要な他者 | 重要な他者との出会い 重要な他者からの容認 |
| 新たな生活の中心 | 競技中心の生活へ |
| 交友関係の再構築 | 仲間意識 必要とされている自分 |
| <自己の変化> | |
| 新たな自己 | 自己の可能性への気づき 自己の可能性への挑戦 適当だった自分からの脱却 |
| アスリートとしての自己 | 向上心 目標の設定 チームの一員としての自分 |
| 生活の充実 | 生活満足感 |
| 受傷前の自己の再現 | 謙虚な自分から受傷前の自分へ |